
Follow Your Heart

Joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Follow Your Heart

【Nコード】

N7104Z

【作者名】

Joker

【あらすじ】

太平洋戦争後半、米軍の高性能戦闘機『グラトニーファング』が極東で猛威を振るっていた。その頃、公爵家出身の沖津恭二は海軍航空隊に入隊することになった。そこで彼は強羅俊三軍曹と浅葱忍一等兵と出会う。彼らと共に任務をこなしていき、『グラトニーファング』という強敵にぶつかる。戦火の中を彼らが生きて、見つけたものは……？ これは空と戦闘機と共に戦場に生きた男たちの物語である。

プロローグ：AD2000東京にて

西暦二千年、いわゆるミレニアムを前にして東京の街は豪華なイルミネーションで着飾っていた。こんな不景気の時代でも、先が見えない時代でも、何かを祝えるのはいいことだ。

そんなことを思いながら、私は本社ビルの最上階にある社長室から、戦後およそ六十年間発展を続けてきた都市を見つめていた。もう疲れたよと挫けながらも、まだ歩くのをやめそうにない。

闇市が開かれ、無法地帯となった焼け野原から、いまや世界が誇る大都市になった東京。そして、その時代の変遷の中を駆け抜けてきた私たち。

その旅路は今までに与えられたどんな試練よりも過酷で、そして今では誇りに思っている。

たまに振り返る。

私が選んで歩いてきた道は間違いではなかったのか、と。

「沖津社長、今日の予定ですが鳩川紀夫首相との会食が予定されています。赤坂のすし屋で」

私の秘書を勤めている若い女性、誉田こんだの言葉で私の思考は現実に戻される。彼女は手帳を手に近づいてきた。

「ああ、その予定だがキャンセルしてくれたまえ」

何故なら今日は、あいつと会う日だから。

「キャンセル、ですか？ 何か重要な予定でも？」

「うむ。あの首相なら、副社長の水無月にでも会ってもらえばいい。とにかく、私は今夜はずせない大事な用事があるのだ」

午後七時。

雪がちらほらと降っている。師走の空気は私と彼が初めて出会った時と違って、冷たい。

一人になつて本社ビルから出ると、彼はもうそこに来ていた

「セカンド・ルーテネント、オキツ」

一人の年老いた男が古びた写真を手に近づいてきた。白黒の写真には若い男と女、そして三歳くらいの子どもの三人が映っている。ちなみに、セカンド・ルーテネントとは軍隊の階級、少尉のことを指す。

それにしても、彼の外見はすっかり変わってしまった。

彼はかつて『グラトニーファンク』を駆っていた、アメリカ海軍一の若きパイロットだったのに。今ではグレーのスーツに身を固めた、ただの禿頭の老人だ。

「久しぶり、だな。ジェームズ・オルブライト少佐」

声も老いている。時間は何かを我々に与える代わりに、何かを我々から奪い去ってしまう。若さはその最たるものだ。

「ああ、元気にしていたか？」

何故だろう。彼と話すと、昔に戻つたような気持ちになる。

かつて、太平洋戦争の頃。大空を戦場として、必死にもがいていた、あの頃に。

「オキツ、約束は覚えているか？」

「もちろん」

私は、既に輝きを失った銀の十字架がついたペンダントを胸のポケットから取り出した。

プロローグ：AD2000東京にて（後書き）

こんばんは。

初めての方にははじめまして。以前の作品を読んでいた方にはお久しぶりです。

初の戦記ものにチャレンジします。

既出の作品と違って（？）ギャグ成分はほとんどありませんが、楽しんで読んでいただければ嬉しいです。飛び上がって喜びます。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

三人の来訪者

晩夏を通り越して涼しい風が吹いている。それに夕焼け空がやけに映える。

その空は世界のどんな画家が描いた名画よりも美しい。もう秋なのだ。

そう思いながらゼロ戦を操縦しているのは海軍航空隊少尉の沖津おきし恭二きよじだった。

年の頃は二十歳くらい。中肉中背の体に黒ずんだ緑色の航空隊の戦闘服を纏っている。つなぎのように、顔以外の全身を覆うもので耐熱性に優れている。頭にはゴーグルのついた先頭帽を着用している。

沖津の駆るゼロ戦の後ろには二機のゼロ戦が空を滑っている。

「おいおい、少尉殿。俺たちをどこにつれていこうってんですかい？」

荒々しい声が沖津の戦闘機内にある無線から聞こえた。沖津の部下、強羅俊三軍曹である。たたき上げの軍人で年の頃は三十代半ば。角ばった顔には歴戦の土らしく、傷が多く刻まれている。親や親戚は下士官として日露戦争と第一次世界大戦を戦い抜いたという。兵庫県の軍人一家の生まれだ。

「愛媛県松山基地だ」

凜とした声が返事として無線で送られる。

「あの『航空の源田』がいる基地ですかい。ところで、今、何が立案されているか知ってるんですかい？」

「知っているさ。源田大佐が考えているのは制空権を得、我々の戦局を好転させるためだろう。いかに少ない被害でいかに大きな戦果を出すか、を思案しておられると聞いている」

ミッドウェー海戦で日本軍は主力戦艦を四つも失った。赤城、飛龍などである。それらに加えて、多くの戦闘機と兵たちをも失った。

戦闘機はまた作ればいい。しかし、兵たちは失えば、再び作ることは出来ない。彼らが持っているノウハウは継承されないまま、時代の裏側に消え去るのである。また、資源と燃料不足も頭を悩ませる問題として顕在化していた。

「少尉殿、あんたは死ぬために行くんですかい？」

「口を慎め、強羅。国のためだ」

国のため、という意味を沖津は何となくしか理解していなかった。この戦争に負ければ、国は米軍をはじめ連合軍に占領され、民は虐げられるだろう。でも、何故国を守ろうとするのか、決定的な動機はなかった。ただ、何となく周りに流されるままそう思っていただけだった。

「国のためねえ。もうあの海戦から三年ですぜ。大本営では勝った勝ったと騒いでいるけど、実際のところは負けっぱなしだ。俺たちや、国民を騙くらかすことに加担してるんですぜ」

「それは仕方あるまい。上の判断だろう。なあ、お前もそう思わないか、浅葱」

無言を貫いていた戦闘機の無線から応えは返ってきた。

「僕はよく分かりません。ただ、戦いを終わらせたい。それだけです。源田大佐の案がまさしくそうなら、僕はそれに賛成します」

幼さが幾分か残っている穏やかな声だ。声の主は浅葱忍あきぎしのぶ一等兵。

このたび新しく沖津の下に配属となった十七歳の新米航空兵である。痩せた体躯で力はないが、機械知識と航空機操縦術に長ける細身の少年である。強羅は彼の気弱な性格は軍人に向かないと以前評していた。

「へっ、ガキが。生意気言ってるんじゃないよ」

「よせ、強羅。浅葱の言うことも分かる」

戦闘機の窓下には四国の緑あふれる景色が見えてきた。

「そろそろ松山基地だ。着陸用意」

沖津は二人の部下に指示を出した。

三機は隊列を整え、基地の滑走路に着陸した。沖津は真つ先に戦

闘機から降りる。

「整列！」

沖津の号令に従い、強羅と浅葱がゼロ戦から降りる。そして、三人は駆け足で迎えに来ていた士官の前まで走り、直立不動の姿勢で敬礼をした。

強羅は筋肉の鎧を纏った屈強な体をこわばらせ、浅葱は緊張のためか、痩せた体が少し震えていた。

「楽にしている。私は松山基地所属、白山久三少佐だ。君たちのは高雄基地の阿部大佐から聞いている。ようこそ、松山基地へ」

坊主頭の壮年の男は人懐っこい笑みを三人に向ける。

「さて早速だが、大佐がお待ちだ。案内しよう」

「はっ、はっ、よろしくお願いします」

三人は源田猛夫大佐の待つ部屋へと通された。

精悍な顔と高い鼻を持った中年の男が木造の簡素な机で本を読んでいた。室内にはベッドと本棚、事務机しかない。持ち主の性格を表しているかのごとく、質素な部屋だった。

「大佐、例の三人をお連れしました」

源田大佐は本を机に置く。そして視線を来訪者へと向けた。

「ご苦労、白山少佐。下がっていいぞ」

「はっ」

三人は上官に敬礼した。先ほどよりも緊張した面持ちで源田大佐を見る。

「君たちを呼んだのは他でもない。今、大日本帝国は窮地に陥っている。戦局の打開を君たちをお願いしたいのだ。君たちは明日レイテ沖へ飛んでもらう」

「待ってください。レイテに行くなら大分基地からでも良かったんじゃないですか」

強羅が口を挟んだ。

「話は最後まで聞け。君たちには新型戦闘機を操縦してもらいたいのだ。ゼロ戦は持久力こそあるものの、総合的な戦闘力ではアメリカ

力の戦闘機に大きく劣る。そこで愛媛航空が新しく開発した戦闘機のテストも兼ねて、実戦をこなしてもらいたい」

「了解しました」

三人の声が重なる。

「うむ。では明日からよろしく頼む。兵舎は白山に用意させてある。

第一号兵舎を使ってくれ」

その兵舎は司令部から一番離れた基地の片隅にある。

司令部を出ると、滑走路を突っ切ってまっすぐ進み、突き当りを曲がる。そこからさらに数分歩くと第一号兵舎があった。

三人の来訪者（後書き）

こんにちは、Jokerです。

正月休み中は結構な頻度で更新できると思います。尻切れトンボにならないように？頑張ります。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

『グラトニーファング』

三人は源田大佐の執務室から退室した後、白山少佐に案内され、木造の兵舎に入った。

「ああ、大変な任務を負っちゃったな」

強羅が戦闘帽を投げ捨てて、部屋の片隅にあるベッドに座った。大きなランプがひとつ天井にぶら下がっていて窓が三つ開けられている。入り口は一つしかない。ベッドが四隅にひとつずつ置いてある、殺風景な部屋だ。

「しかし、我が大日本帝国の行方を左右する任務だ」

沖津も空いているベッドのうちの一つに腰掛けた。入り口から最も遠いところにあるベッドだ。

強羅と同じように帽子を投げ捨てる。柔らかそうな総髪を右手でかきあげた。

「それで、強羅はどこまで知っているんだ？」

浅葱は二人が座ったのを確認すると、体をベッドに放り投げた。

「ああ。新しい部隊の編成までは知ってます。剣部隊、って名前です」

「航空隊のやり手ばかりを集めた少数精鋭の部隊、ということは知っていますか？」

「いいや。ただ、あのデストロイヤー菅野がいるってことは知ってますが」

「はは、あいつがいるのか」

菅野直。凄腕のパイロットだが、出撃するたびに戦闘機を潰しまくるため、ついたあだ名が『デストロイヤー菅野』。海軍随一の熱血漢としても有名である。

浅葱は眠りに落ちていた。緊張の連続だったから無理もない。沖津はそう思って、少年の寝顔を見た。

「なあ、強羅」

「ん？」

「戦争、終わったら何がしたい？」

「決めてねえですよ、そんなの。大体俺は昔っから軍にいたんですし、これ以外の生き方なんて考えたこともねえ。頭もそんなに良くねえし」

「なんだ、つまらないな」

「そういう少尉殿は決めてるんですかい？」

「私は戦争を、この戦いを子供たちに教える仕事がしたい」

「教師ですかい？」

「そうなるかな」

沖津はごろりとベッドに寝転ぶ。

「分からないんだ。何が正しいか、何をすべきか」

「そんなの俺だって分からねえです。だから、何となく思いついて行動してるんですよ。そういう時は」

「思慮が足りない、とはいえないか」

沖津は苦笑した。

「戦争というのは無慈悲で残酷なものだな」

何を今更と強羅は返事する。

「ああ、そうだな。明日、もしかしたら浅葱が死ぬかもしれない。

お前も私も死ぬかもしれない。そう考えたら、怖くなってきた」

ランプには一匹の蛾がまとわりついてた。

「そうですね。戦争は、本当に恐ろしいもんです。少尉殿も何度か死線をくぐられたというのに弱気ですな」

「私はいつだって怖がっていたよ。そして恐れていた。私のせいで部下が死ぬのではないかと」

「……少尉殿」

「何だ？」

「この服を着て、戦闘機乗りになった時から死ぬ覚悟は出来てますよ。これが死に装束になることくらいは予想していますぜ。俺たちは相手の生きる未来を奪うんだ。当然、奪われることも覚悟してま

す」

強羅が珍しく雄弁になっている。

「アメリカのグラマン以上の高性能戦闘機『グラトニーファング』が今、フィリピンに展開しているそうです。最高速度、武装、装甲のどれをとつてもゼロ戦の敵じゃない。負けるのは目に見えている」「やめろ、強羅」

「事実ですぜ。このままいけば、少なくともサイパンを死守できない。負け戦になるんだ」

沖津は整った顔をしかめる。

「負ければ、我々はすべてを失うだろう。米国が、連合軍がわが国の富や人々を奪うだろう。だからこそ、我々は負けられないのだ。大日本帝国同胞の未来を背負っているのだから」

「……少尉殿、何であんたは戦争に参加しようと思っただんですか？ あんたの家は沖津公爵家だ。そして親父殿は元外務卿の沖津錬太郎殿だ。何故戦争に参加したかが分からない。高みの見物を決め込むことだって出来たはずだ」

沖津が戦争に参加しようと思ったのは元々米国嫌いだっただけだと説明した。降りかかる火の粉は全力で振り払わなければならないと考えていた。

一方でひどく死を恐れている。周囲の人の死、それに己の死を。「わが国は変わったな。最近、野球でも、ストライクと言ったら駄目になった。ストライクは『よし』、ボールは『だめ』と言う様になった」

灯にまわりついていた蛾が翼を焼かれ、地に墮ちた。

「アメリカ憎しの風潮が国内で渦巻いているんでしょうな」「それもあるだろう。それ以上に米国に敵対的感情を煽ることによって士気を保とうとする狙いもあるんじゃないか」

政府が情報を統制していることを沖津は知っている。

それもまた必要なのだ、必要悪なのだと言いつつ聞かせていた。

「くだらない話をしたな。もう休もう」

既に浅葱は寢息を立てている。

「お前も、疲れたんだな」

少年の顔を見て、沖津は微笑んだ。

『グラトニーファンク』（後書き）

こんばんは、プログラムを組んだ後で投稿しているjokerです。

名前だけ登場する菅野直かんのなおしは実在した人物です。興味のある方は是非調べてみてください。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7104z/>

Follow Your Heart

2011年12月26日23時57分発行